【書評】

小野真由美著『国際退職移住とロングステイツーリズム ――マレーシアで暮らす日本人高齢者の民族誌』（明石書店、2019 年）

吉村真子

マレーシアは、2006 年以降、14 年連続（2006-19 年）で日本人が住みたい国 No.1 に選ばれている（ロングステイ財団の調査）。日本人に人気のオーストラリアやハワイを抑え、マレーシアが 1 位になっている理由としては、南国で気候も良く、日本に比べて物価も安く、治安もよく、英語も通じ、生活環境やインフラや医療サービスもそれなりに整い、国民は親日的で、日本からは飛行機で約 7 時間、といったことが挙げられよう。またマレーシアの長期滞在ビザであるマレーシア・マイ・セカンドホーム・プログラム（MM2H）は、最長 10 年間有効（更新可）であり、同プログラムの日本人取得件数は、制度が始まった 2002 年から 2018 年 6 月までの累計で 4,618 件と、国別ランキングで中国に次ぐ 2 位となっている。

本書は、そうした MM2H プログラムを中心として、「国際退職移住（international retirement migration）」、すなわち、退職後の日本人高齢者の自発的なマレーシア移住・長期滞在の事例から、高齢者の国境を越えた日常生活の営みを文化人類学の手法を用いて民族誌的に記述するものであり、移民でもなく旅行者でもない流動的な人々の暮らし方に観光研究と移住研究からアプローチ（本書 : 15）している。なお本書は、2012 年 12 月に著者が東京大学大学院総合文化研究科に提出した博士論文「日本人高齢者の国際退職移住に関する文化人類学的研究――マレーシアの実例から」をもとに加筆、修正したものである。

本書の章構成は、下記のとおりである。

はじめに
第 1 章　序論 ――高齢者の国際移動を捉える視点
第 2 章　国際退職移住の商品化 ――ロングステイツーリズムの成立
第 3 章　ホスト国マレーシア ――ゲストをめぐる選別化の論理
第 4 章　「渡り鳥」型のロングステイヤー ――キャメロンハイランドの事例から
第 5 章　「定住」志向のセカンドホーマー ――クアラルンプールの事例から
第 6 章　ケアの越境化
第 7 章　結論
おわりに

各章の内容は、まず第1章で序論として高齢者の国際移動をどう捉えるのか、研究の視点を提示し、第2章で日本人高齢者の移動を発生させる社会経済的および文化的要因を考察している。第3章では、受け入れ国マレーシアのMM2Hについて、アジア通貨危機以降の経済復興策として政府が開始した観光政策としての位置づけも示しつつ、同プログラムのミドルクラス外国人長期居住（滞在）の制度的な形成の過程を記述する。そして、第4章、第5章、第6章では、マレーシア国内に滞在する日本人高齢者たちの日常生活の参与観察から、高齢者が老後の自己実現としてマレーシアでの生活を営む中で、国民年金などの日本の社会保障制度と、現地の生活環境とを巧みに利用しつつ、アドホックに生活拠点を変えて流動的に生活する様子を民族誌的に記述している。第4章は「渡り鳥」型の長期滞在者の多い高原リゾートのキャメロンハイランドの事例、第5章は「定住」の側面が近い首都クアラルンプールの事例、第6章は「ケア・マイグレーション（介護移住）」の事例を扱っている。

本書は、博士論文として先行研究や方法論の議論や論文での視角の議論もしっかりとしており、また第2章以降のロングステイやMM2Hやケア・マイグレーションの事例など、聞き取り調査の内容も含めて、具体的な内容や議論は興味深く、マレーシア研究者にも一般読者にも、さまざまなことが学べて内容としても面白い1冊となっている。

著者は本研究のために、国内での調査に加え、2004-05年と2006-09年、2012年に現地で聞き取り調査や参与観察を行っている。とくに本研究の分析対象である国際退職移住の当事者に対する詳細なインタビュー調査（移住者159名、93事例）の内容の記述は、本書の特長ともなっており、当事者のマレーシアでの生活／滞在を具体的に示している。

著者は、日本人高齢者のマレーシアへの国際退職移住は、ライフスタイル移住と市場経済との関連性を示す素材と位置づける。マレーシア政府のMM2Hによる外国人の長期居住者の受け入れは観光政策の一環でもあり、国際退職移住の主体となるのは、移動可能な経済力を持つ人、すなわち消費者であり、ここにおいて、ライフスタイル移住と新自由主義との親和性が指摘できるとする。そしてロングステイツーリズムの商品としての売り方を示しながら、国際退職移住の市場化、商品化の過程を考察し、ロングステイ説明会やガイドブックなども含めて、老後のマレーシア移住が高齢者の自己実現および家計戦略としてイメージが形成されたことを明らかにする。

MM2Hは、観光政策の延長でもあり、申請の資格条件には、一定水準以上の資産保有も求めている。日本では団塊の世代の退職により、退職金や年金を受給する豊かな消費者が、少子高齢化による老後の不安というネガティブなプッシュ要因と、「いきがい」や「自己実現」といったポジティブなプッシュ要因とで、マレーシアのロングステイの選択に向かう。

著者は、マレーシアへの日本人高齢者の国際退職移住を3分類し、(1) 日本を生活の拠点として、短期的なロングステイツーリズムを繰り返す「渡り鳥」型、(2) 国外を生活の拠点として年に1～2回日本に帰国する「定住」型、(3) 日本から国外に生活の拠点を移す要介護の高齢者の「ケア移住」型とする。第1分類のケースとしてキャメロンハイラン

ド、第2分類としてクアラルンプールに長期滞在する日本人退職者の調査の内容から議論を進め、第3分類の「ケア移住」型については、クアラルンプール近郊のプタリンジャヤの日本人専用介護施設ナースロッジ日本のケースを取り上げ、2007年5月の開設から2008年9月の閉鎖までを丁寧に描いている。以上を通じてアジアの国際退職移住は医療や介護を求めた国際移動、すなわち「労働力を必要とする」人の国際移動という側面があることを示した。

読後感として、いくつか気になる点についても、指摘しておきたい。

本書の特質は、国際退職移住の当事者に対する詳細なインタビューをもとにした分析と議論である。質的な聞き取り調査を重視し、量的なアンケート調査といった手法を取らなかったため、全体の分布が数字として示されないところもある。そのため、移住者が移住先にマレーシアを選択した理由の優先順位や、月々の支出金額など、そうした点はほかの調査や研究なども併せてみていくことが必要だろう。

また移住者の属性とも関連した形で、たとえば、学歴や国際体験や異文化の受容度、マレーシア社会や文化に対する許容度や価値判断など、もう少し踏み込んだ部分も分析対象としてほしかった。そしてまた、マレーシアの長期滞在を中止して帰国もしくは他国に居住を移していく状況の分析も読みたかった。

ジェンダーの議論に関しては、「移住の女性化」や「グローバル・ケア・チェーン」、「家事などからの女性の解放」といった視角からの掘り下げ、たとえば、家事労働やケア労働の性質と日本人高齢女性、夫婦関係も含めたジェンダー的なヒエラルキー、日本人男性が自明視している男性性などについてのさらなる議論も求められよう。

家政婦やメイドを雇うことで、家事や介護の厄介ごとから解放され、「（将来は）メイドさんを雇うことで夫の介護を安心してできると思った」と妻は言い、夫はマレーシアに住むことは妻への思いやりだと言う。そうした文脈で、マレーシアでは家政婦を気軽に安く雇えるのが大きなメリットとロングステイ説明会などでも強調されるが、実際には国際退職移住者で家政婦を雇っているのは5%に過ぎないという調査もある（稗田, シティ・ハミン, 2016: 42）。そもそも日本では家政婦を雇うことは一般的ではない。マレーシアで、インドネシア人やフィリピン人の家政婦を雇って、外国人雇用の責任を負ったり、気を遣ったりするよりは、必要な時に数時間だけ家政婦に来てもらうことも可能である。またマレーシアでは、外で食事をするのも、屋台で食べ物をパック（テイクアウト）してもらうのも安く気軽にでき、ランドリーショップに洗濯物を何キログラムでいくらという形で持ち込むこともできる。日頃の家事労働を担わざるを得ない日本人女性にとっては、介護は別として、そうした家事の外部化サービスのあり方こそがマレーシア生活のメリットともいえるだろう。

こうした既存の性別役割分担の図式の中で、掃除を担当するようになった夫の一例が示されるが、全体としてジェンダー的なヒエラルキーは変わらず、ケア／介護のボランティアとなるのもマレーシア人と結婚した国際結婚移住の女性などである。また単身で来ている日本人男性は、日本に残る妻に自由な時間をあげていると考える。一般に日本社会では

夫の退職後、夫は「濡れ落ち葉」でやることもなく、妻は友達関係や趣味、地域コミュニティでも充実しているといわれるが、たとえば単身でマレーシアに数か月ずつ来ている日本人男性の場合に日本に残っている妻はどう認識し、夫の留守中にどれだけ充実した生活を過ごしているか、といった問いも必要だろう。日本人男性の老後の日常生活や余暇といった観点でも、男性社会の象徴と見なされることが多いゴルフやマージャンが老後の日本人高齢者の日常生活での余暇として彼ら自身にどう認識されているか、といった視点もあるだろう。

ほかにも、細かいところではあるが、英領マラヤにおける移民の歴史の説明の箇所で、「19 世紀に本格化した国際的なプランテーション経済の拡大」（本書 : 87）との記述があるが、ゴムのプランテーションが本格的に展開したのは 1910 年代以降である。引用した邦文献の関係もあろうが、第 2 版が出る際には訂正されたい。

国境や地域的な領域を超えた人の移動については、それこそ人類の発祥の地アフリカから世界中に人類が移動していったと考えるならば、人類史上、当初から行われてきた。そうした人の移動に関する研究としては、人口移動や移民に関する分析や研究も歴史がある。また国境が設定されたことにより、従来からの地域コミュニティ内での人の移動が、国境を超えるものとなっている。インドネシアとマレーシアとの間の人の行き来などもそうであろう（吉村, 1998）。そうしたことを考えると、「労働を目的としない人の移動」の研究は必ずしも新しくないといえるかもしれない。

しかしながら、1980 年代以降の国際労働力移動の議論の発展と批判から、労働力の移動といわれるものは人の移動であり、さまざまな問題を包摂しているという指摘と問題提起は大きなものであった。

1980 年代に東京大学で森田桐朗教授（国際経済）主催の国際労働力移動研究会（伊豫谷登士翁氏も参加していた）はサスキア・サッセンなどの研究を日本に紹介し、大学院生として参加していた筆者は、グローバル資本や労働についてのダイナミックな議論に、従来の資本や労働や階級の議論に対する新たな視座や展開に感銘を受けた。1990 年代以降、「マイグレーション（migration）」「ヒト／人の移動」という語句が一般に使われるようになり、さまざまな議論が提起されてきた。いまや、多くの学問領域でマイグレーションがさまざまな視点から議論されている。またマイグレーションと同じく、本書の議論のもうひとつの視角となる観光研究もいまや確立した学問領域として位置づけられている。本書は、国際退職移住のエスノグラフィーとして、そうした議論の中で、新たなひとつの展開と位置付けられよう。

2020 年の世界的な新型コロナ・ウイルスのパンデミックは、人々のライフスタイルを一変させ、世界における人々の移動を制限した。日本でも 2020 年以降、国内における移動も規制され、今後、海外への渡航も従来の形に戻るには時間がかかるであろう。マレーシア政府は一時停止していた MM2H の申請を再開したが、所有資産条件を大幅に引き上げ、担当官庁も内務省に変更した。こうした状況で、現在、国際退職移住でマレーシアを選択した日本人はどうしているのだろうか。また今後、日本人の国際退職移住やケア・マ

イグレーションなどはどうなるのか。著者の研究の今後にも期待したい。

〈参考文献〉

稗田奈津江、シティ・ハミン・スタパほか（2019）「マレーシアマイセカンドホームプログラム政策の妥当性：日本人セカンドホーマーの視座から」『地域イノベーション』第 4 号、35-46。

吉村真子（1998）『マレーシアの経済発展と労働力構造――エスニシティ、ジェンダー、ナショナリティ』法政大学出版局。

（よしむら・まこ　法政大学）

2023 年 4 月 2 日掲載決定